

火野葦平『広東進軍抄』の基礎的検討

松本和也

要旨：この論文では、日中戦争をモチーフとした戦争文学の1つ、火野葦平『広東進軍抄』（昭和13～14年）をとりあげる。火野の文名を一躍高めた「兵隊三部作」（「麦と兵隊」、「土と兵隊」、「花と兵隊」という枠組みに入らなかったため、これまで『広東進軍抄』は、研究史上においてほとんど検討される機会がなかった。しかしながら、『広東進軍抄』は、「花と兵隊」と同時期に書かれた、火野葦平初の新聞連載小説の1つであり、内容に関わる局面だけでなく、発表形態とその特徴、銃後の受容など、検討すべき課題の多い、重要な作品だといえる。そこで本稿では、『広東進軍抄』研究のスタートラインを引くべく、新聞紙上の初出掲載状況や単行本の確認、同時代受容の様相、内容の予備的考察まで進め、研究基盤の整序を目指した。

キーワード：「広東進軍抄」、「海と兵隊」、東京日日新聞社、大阪毎日新聞社、久米正雄

I はじめに

アジア・太平洋戦争期において、文学者の多くは、それまでとは異なった条件下での執筆・活動を強いられ、（さまざまな動機やレベルがあるにせよ）いわゆる国策の線に沿うか、文学的信条を貫いて活動を停止するか、など、何かしらの選択／変容を余儀なくされた⁽¹⁾。

そうしたなか、戦争文学の雄として（しかし、戦争末期まで戦場に身を置きながら）活躍した兵隊作家に、火野葦平（明治40年～昭和35年／本名：玉井勝則）がいる。

日中戦争開戦から一年が経とうとする頃発表された火野葦平「麦と兵隊」（『改造』昭13・8）は、『内地の読書界のみならず、一般社会に非常な反響を巻き起し、身は戦場を馳駆して居る間に、彼は一躍文壇の寵児になつてしまつた⁽²⁾』と評されたように、狭義の文学領域にとどまらない広範な読者を得て⁽³⁾、ベストセラーとなり、以後の文学場を方向づける規範ともなった。

以後も戦時下に多くの小説を書きついでいく火野は、新聞小説を通じて読者（国民）に語りかける機会もたびたびもった⁽⁴⁾。本稿では、そうした火野が書いた戦時下の新聞小説のうち、一番はじめに発表された『広東進軍抄』（初出タイトル「海と兵隊 広東進軍抄」）に注目する。

ここで、あらかじめ作品タイトルについて整理しておく。というのも、この作品をめぐる「広東進軍抄」／「海と兵隊」というタイトルが初出当時から今日まで、併存してきたからだ。（本稿でも後にふれるが）火野自身は当初、「広東進軍抄」として執筆し、原稿を送付していたようだが、新聞連載時には「海と兵隊」というタイトルが、著者には無許可で掲げられてしまう。ただし、『東京日日新聞』では「広東進軍抄」を角書きのように示し「海と兵隊」が本題に見えるが、『大阪毎日新聞』では、「広東進軍抄」を本題として、「海と兵隊」が副題のように示されている。その後上梓された初刊単行本は『広東進軍抄』と題され、「海と兵隊」の文字はみられない（ただし、帯には「海と兵隊」という文字も

小さく刷られている)。なお、戦後まとめられた『火野葦平選集〔全8巻〕』（東京創元社、昭33～34）に、『広東進軍抄』は収録されていない。また、『火野葦平兵隊小説文庫〔全8巻〕』（光人社、昭53～55）では、『火野葦平兵隊小説文庫 第4巻』（光人社、昭55）に『広東進軍抄』というタイトルで収録されている一方で、『火野葦平戦争文学選〔全7巻〕』（社会批評社、平25～26）では、『火野葦平戦争文学選 第5巻』（社会批評社、平26）に『海と兵隊』というタイトルで収録されている。してみると、「広東進軍抄」という作家が選んだタイトルがありながら、「麦と兵隊」、「土と兵隊」、「花と兵隊」というひろく流通した兵隊三部作との関連から、「海と兵隊」というタイトルも併存してきたといえる。以上を確認した上で、本稿では「海と兵隊」というタイトルは採らずに、新聞初出版を指す際には「広東進軍抄」と、単行本・一般的な用法を指す際には『広東進軍抄』と表記する。

同作の概要については、再刊の際、モチーフとされた戦況とあわせて次のように紹介されている。

火野は、一九三八年七月から始まった武漢攻略戦と同時の広東作戦（「援蔣補給路」の遮断のための、香港の近くのバイアス湾に奇襲上陸——同年十月、広州占領）に参加したが、これを描いたのが、本書の原題『海と兵隊』（広東進軍抄）だ⁽⁵⁾。

ここであわせて、辞典記述における「火野葦平」の項を参照しておきたい。

三七年九月召集され、第十八師団に所属し杭州湾上陸作戦に参加。入営前日に書き上げた「糞尿譚」が三八年二月に芥川賞を受賞し、三月、駐屯地杭州の中隊本部で陣中授与式が行われる。馬淵逸雄中佐の斡旋で、中支那派遣軍報道部に転属。徐州作戦に参加し、『麦と兵隊』を執筆、銃後からは見えにくい戦地の日常を描き、爆発的なベストセラーとなる。『土と兵隊』『花と兵隊』を合わせ兵隊三部作と呼ばれる。「兵隊」という言葉を好んで用いた⁽⁶⁾。

今日、このように紹介される火野葦平とは、「麦と兵隊」を中心とした兵隊三部作の書き手として文学史に名を残し、そうした興味関心からのみ、時折、論及される文学者だといってよい⁽⁷⁾。逆にいえば、兵隊三部作から漏れる火野作品は、たとえ戦争文学であっても論及される機会は激減してしまう。後述するように、「海と兵隊」と「花と兵隊」とは、別の新聞ながら重なる時期に連載されていたにもかかわらず、兵隊三部作の一角をなす「花と兵隊」がそれゆえに論及される一方で、（作品としての善し悪しや評価は措くとして）『広東進軍抄』は研究の遡上に載せられることがほとんどなかった⁽⁸⁾。

こうしたなかで、近年、『広東進軍抄』に関わる重要な研究成果があいついで公開された。その第一は、増田周子「火野葦平「広東作戦」従軍手帳翻刻——陸軍報道班員の記した支那事変の記録——」（『関西大学文学論集』平23・9）であり、第二は、越前谷宏「火野葦平『広東進軍抄』とその周辺——戦争と従軍記者」（『国文学論叢』令1・2）である。前者は、火野が「広東進軍抄」に書いた従軍時の日記（翻刻）であり、貴重な参考資料だといえる⁽⁹⁾。後者は、「広東進軍抄」を軸としてほかの従軍記者による体験記・従軍記⁽¹⁰⁾も視野に収め、作品横断的な検討によって広東作戦の実態に迫る先行研究である。

いずれも、現実世界の出来事との関係から、火野葦平という文学者／『広東進軍抄』という作品が、どのように再構成され—成立しているかを検討するものだといえる。このような成果によって、ようやく『広東進軍抄』研究がスタートしたとはいえるが、緒についたばかりであり、残された課題は多い。何より、初出が新聞連載であったこともあり、書誌情報すら整備されていない現状がある。

そこで本稿では、『広東進軍抄』をとりあげ、新聞紙上の初出掲載状況や単行本内容の確認からはじめ、同時代受容の様相、内容の予備的考察まで進め、研究基盤の整序を目指す。

Ⅱ 初出「広東進軍抄」の執筆・発表経緯

昭和12年、「糞尿譚」を書きあげて応召した火野葦平は、出征後に芥川賞を受賞し、授賞式は陣中で催された。兵隊作家としての第一作「麦と兵隊」（『改造』昭13・8）によって、一挙にスターダムへと駆けあがった火野葦平は、第二作「土と兵隊」（『文芸春秋』昭13・11）によって、その地歩を確かなものにした⁽¹¹⁾。そればかりか、日中戦争開戦後に待望されていた戦争文学の担い手として、火野はブームの渦中へと巻きこまれていった。その時期の様相について、板垣直子が次のように言及している。

火野の文名が一層高まり、戦地にある彼に向つてジャーナリズムの原稿争奪の起つたことも興味深い。火野の予定してゐた三部作の中残る「花と兵隊」は、かくて十三年の末から「東京朝日新聞」にのつた。なほ、他に「海と兵隊」といふ作品が同じ頃「東京日日新聞」にのつた。後者は単行本になつた時には「広東進軍抄」と題を改めた⁽¹²⁾。

ここでいう原稿争奪戦前後の事情については、戦後、火野が「解説」で振り返っている。

昭和十三年十月十二日、第十八師団と第百四師団とは、南支那のバイアス湾に敵前上陸を敢行、惠州、博羅、増城を経て、十月二十一日、広東に入城した。私は野原大尉の指揮下にあつて、市の東山地区にある宋公館に、十人ほどの特務班員とともに駐留した。四階建のすばらしい洋館で、立派な部屋をあてがわれ、「兵隊ちゆうもんは、昨日は乞食、今日は王様じやなあ」などと笑つたものだが、後に、この家に次々に怪異が起り、幽霊屋敷であることがわかつたのである。しかし、まもなく、私は宋公館の化けものたちに悩まされる以上に、新聞という怪物に悩まされる羽目になつた⁽¹³⁾。

このようにして、『広東進軍抄』のモチーフとなつたバイアス湾敵前上陸にはじまる広東作戦当時、人気兵隊作家となつた火野のもとに、次のように新聞小説執筆のオファーが舞いこんだという。

或る日、朝日新聞広東支局長の木下宗一氏がやつて来て、「花と兵隊」を朝日の連載小説としてぜひ書いてもらいたいという。〔略〕新聞小説となると、これまでとまつたく変つて来る。「麦と兵隊」「土と兵隊」はルポルタージュ的要素が濃厚であつたが、「花と兵隊」はフィクションをかなり入れて、純粹の小説にしてみようと私は考えた。〔略〕そういういろいろなことを考えながら準備をすすめていると、奇妙な問題がおこつて来た⁽¹⁴⁾。

ここでいう《奇妙な問題》の内実は、朝日新聞社への「花と兵隊」執筆が決まつた後で、“火野葦平による初の新聞小説”を掲載しようとした久米正雄による執筆依頼に端を発する。

当時、毎日新聞の学芸部長は久米正雄氏であつた。久米先生は、従軍ペン部隊として上海に来られたとき、毎日新聞にもなにか書いて欲しいといつていたが、私が広東に来てから、毎日の広東支局長三原純氏を通じて、広東攻略記をぜひといつて来た。その前から、私は「広東進軍抄」を起稿して四、五十枚書いていた。これは大体、命令に近い師団の強い意向にもとづいたもので、実は私はあまり気がすすまなかつた。作戦のたびに、戦記を書かなければならないということはない。書かずにはすめば書きたくなかつた。しかし、師団の意向にはしたがわなくてはならないので、どうい

う形式で発表されるものかも考えず、宋公館の一室で、私は気乗りのしない「広東進軍抄」のペンを進めていたのである⁽¹⁵⁾。

火野によれば、掲載のあてのない状態ながら、《師団の強い意向》に即して広東作戦に関する《戦記》を書き進めていたところ、折しも毎日新聞からの執筆依頼があり、《すべて、軍に一任した》結果、《師団司令部の許可で、「広東進軍抄」は毎日へ連載されることに決定した⁽¹⁶⁾》というのだ。

ところが、ここで、朝日、毎日の両者が競争をはじめたのである。〔略〕とうとう、両者いつせいに、同じ日から掲載するという妥協案を出して、やつと解決した。その日は十二月二十日と定められた。私はどちらにも最初の原稿を渡した。ところが、朝日の方は「花と兵隊」第一回が十二月十九日の夕刊に出たため、十二月二十九日の朝刊から載りはじめた毎日より半日早いことになった。前日の夕刊は十二月二十日火曜日の日附になっているから、約束どおりだということであつた。それで、朝日が勝つたというのだ。毎日の方はペテンにかかつたという。この半日の差を大事件として争うジャーナリズムのありかたに、私は不気味なものを感じた。やがて、毎日新聞が届いてみると、「海と兵隊」という題になつていて、私はびつくりした。広東攻略戦は別に海と関係はない。上陸までの輸送船での海上生活が描かれているけれども、それで「海と兵隊」というなら、杭州湾敵前上陸記「土と兵隊」も「海と兵隊」ということになる。これは久米先生がそうしたということで、後で諒解を求められたが、当時、私の書くものはすべて、なんとかと兵隊でなければならなつたのかも知れない⁽¹⁷⁾。

ここでは、《朝日、毎日の両者》が競つたとされる肝心の日付けなどに混乱がみられるが、注目しておきたいのは、火野が《不気味なもの》を感じた新聞社による原稿争奪戦の加熱ぶりと、火野の戦争文学の代名詞ともなった、《なんとかと兵隊》というタイトル（名）のヴァリエーションである。

以下、火野葦平「広東進軍抄」の新聞掲載状況を確認していきたい。まずは、菊池寛「西住戦車長伝」とあわせて連載前に掲出された、社告「戦争文学の二大雄篇」（『東京日日新聞』昭13・12・19）を参照しておく（同日の『大阪毎日新聞』〔1面〕にもほぼ同文の記事が、同一記事名で掲出される。ただし、火野葦平「作者の言葉」は掲載なし）。リード文は、次のようなものである。

わが社は常にこの非常時局下において正しく深き認識の下に国論の第一線に立ち一億国民の精神総動員に最大の協力をつぎつぎとあることは齊しく江湖の認むるところであるが、こゝに聖戦第三年を目睫に控へて更に二大国策文学を三百万読者に捧げるの光栄を誇りとするものであり、かゝる壮挙は本社のひとりなし得るものであることを併せて自負するものである〔。〕

同文は、進行中の日中戦争に取材した二作品を明確に《国策文学》と称しており、それらを掲載することによって《一億国民の精神総動員》へ寄与しようとする東京日日新聞社・大阪毎日新聞社の姿勢は明らかである。

火野葦平作／林唯一画「海と兵隊（広東進軍抄）」については、次の紹介が読まれる。

世界の戦争文学史上に「西部戦線異状なし」以上の輝かしき記録を樹立しつつある火野葦平氏は「麦と兵隊」「土と兵隊」に次ぐ第三作「海と兵隊」（広東進軍抄）をけふの夕刊紙上より発表することになった、これは氏が広東攻略戦の陣中にあつて執筆せるもの、しかも作者が前二作を凌ぐ作品であるとの自信を持つ巨篇である火野氏の現地報告文学が新聞紙上に発表されるのは実にこれを

以て最初とする、これこそ本社が読者とともに大なる誇りとするところである、火野軍曹は杭州湾敵前上陸に忠勇なる勲功をたて、のち軍報道部員として徐州大海戦に参戦、三転して南支攻略の聖師に加はつた勇士であり弾雨の中に身を曝しつゝ、逞しき精力をもつて「麦と兵隊」「土と兵隊」の二作を完成、全日本の読書界を席卷し「戦争文学は少くも戦後十年を経なければ現れず」となす世論を見事に覆した現代日本文学界の巨人である。今回本紙上に発表される「海と兵隊」は最も新しき支那事变ともいふべき広東攻略の参戦記録であり、義烈世界に比類なきわが軍人精神の芸術的結晶である、しかもこれが表現するところのものは南支を攻むる皇軍がバイヤス湾敵前上陸に至るまでの海上生活を終へて、北回帰線を遙か南に亜熱帯の太陽の直射するところ進撃また進撃、想像も及ばぬ強烈な炎暑と、困難な地勢的条件を征服して歴史的偉業をなし遂げた広東攻略の記録的迅速戦である、作者はそれを網膜に映じ、胸をうたれた印象そのものを、その場で生々しき記録文学に結晶せしめたのである、そこに自づと浮び出した素裸の人間こそ“火野文学”の最大の価値である、本社はこゝに硝煙と血を浴びた文学「海と兵隊」および「昭和の軍神、西住戦車長伝」両巨篇の連載にあたり、前線銃後を問はず全国読者の熱読を望んでやまぬ次第である〔。〕

すでに朝日新聞への「花と兵隊」連載が決まっていた火野に、半ば強引にもう一作新聞連載を書かせることで、久米正雄は火野の戦争文学《第三作》にして初の新聞小説を自紙に掲載したかったのだ。なお、この社告に付された火野葦平「作者の言葉」も、次に引いておく。

歴史的な大作戦であつた広東攻略戦が、十月十二日バイヤス湾上陸以来僅十日間で結末を告げたといふことは、各方面を非常に驚かしたやうであります。それは私達兵隊自身すら、一寸驚いたやうでありました。しかしながら、いふまでもなく、そのかげにはわれへの「おそろしき兵隊」の筆舌に尽し難い惨憺たる労苦があつたのであります。私は九月末中支派遣軍報道部から、原隊復帰と同時に部隊本部参謀部勤務を命ぜられ、野原参謀殿の指導下にあつて、主として情報蒐集の任務を帯び、この光輝ある広東攻略戦に参加従軍致しましたが、遂に不甲斐なくも炎熱の行軍に幾度か倒れ、十分に任務を遂行することを得ませんでした。たゞ私は前に発表しましたものと同じ趣旨のもとに芸のない話ではありますが、同じ日記体の形式により一人の兵隊のありのまゝの記録として残すことに努めました。今度の従軍に際しましては〇〇部隊長はじめ部隊本部の方々の示された御好意を忘れることが出来ません、一々明記致しませんが、深く謝意を表する次第であります（広東にて、火野葦平）（1面）

ここで火野が強調しているのは、短期間でなされた広東攻略作戦に関わつた《われへの「おそろしき兵隊」の筆舌に尽し難い惨憺たる労苦》であり、本稿Vでもこの点に注目した本文読解を試みる。

なお、「広東進軍抄」連載開始後にも、社告「新春本誌の三大豪華篇」（『東京日日新聞』昭13・12・25）において、菊池寛作／伊原宇三郎画「昭和の軍神 西住戦車長伝」、吉屋信子作／岩田専太郎画「女の教室」とあわせて、火野葦平作／林唯一画「海と兵隊 広東進軍抄」にも次の言及がみられる。

世界戦争文学史上に輝かしき記録を樹てつつある火野葦平著氏の現地報告文学の新聞紙上における最初の発表である「海と兵隊」（広東進軍抄）は目下夕刊に連載中であるが「火野文学」の最大価値たる飾り気なき人間性の表現と、そこに描き出された生々しき事実が、なほ国民の記憶に新たな広東攻略の迅速戦といふ最新記録であることによつて、果然全日本の読書界を席卷しつゝあるのは本社の甚だ欣快とするところである、今や前線銃後を貫いて絶賛の嵐吹きまくる硝煙と血を浴びた文学「海と兵隊」は江湖の期待に背かず新年と共にいよゝ佳境に入り「火野文学」の神髓に正に

触れんとしてゐる、引続き御熱読あらんことを（1面）

ここでも、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社は、火野の《最初》の新聞小説として「広東進軍抄」を位置づけようとしていく。

こうして『東京日日新聞』（以下、『東日』と略記）・『大阪毎日新聞』（以下、『大毎』と略記）紙上に連載された「広東進軍抄」について、以下、連載状況一覧表（[表1・2]）を掲出する。あらかじめ初出情報を示しておけば、火野葦平「広東進軍抄」（『大阪毎日新聞』昭13・12・19～昭14・1・30〔全37回〕／『東京日日新聞』昭13・12・20夕～昭14・2・15夕〔全47回〕）ということになる。東西両紙の掲載状況は大きく異なり、全体の本文は同一ながら、朝／夕刊の別、掲載回数、挿絵・写真・タイトルカット、それらも含めた^{レイアウト}配置などにも大きな違いがみられた。なお、挿絵は^{はやしただいち}林唯一（明治28年～昭和47年、挿絵画家）が担当し、『東日』版に挿絵47枚とタイトルカット7枚（挿絵26枚とタイトルカット4枚が『大毎』版にも使用された）、おそらく、それとは別に『大毎』版に挿絵3枚を描いた。

『東日』版については[表1]、『大毎』版については[表2]に整理したが、いずれも、「タイトル」、「掲載日」（『東京』版は夕刊、『大阪』版は朝刊の表記どおりの日付）にくわえ、「日付」欄には小見出しとなった作中日記の日付を示した（ただし、冒頭から8日分綴られる「十月〇日」については、区別するためa～hを付した）。「タイトルカット」欄はタイトルカットを「TC」、『東日』版は「東」、『大毎』版は「大」と略記し、掲載順にナンバリングした（『東日』版を流用したと思われる『大毎』版のタイトルカットについては、下段にパーレンで『東日』版の略記号を示した）。「挿絵」欄は挿絵を「IL」、『東日』版は「東」、『大毎』版は「大」と略記し、掲載順にナンバリングした（『東日』版を流用したと思われる『大毎』版の挿絵については、下段にパーレンで『東日』版の略記号を示した）。

なお、『大毎』版では、挿絵とは別に写真が掲載される日もあったが、その際は「日付」欄下段に、キャプションを示した。『東日』掲載の挿絵がタイトルカット位置に配置された場合、*を付した。

[表1]「広東進軍抄」『東日』掲載状況

タイトル	掲載日	面	日付け（小見出し）	タイトルカット	挿絵
広東進軍抄 海と兵隊（1）	19381220	1	十月〇日 a	なし	IL 東 01
広東進軍抄 海と兵隊（2）	19381221	1	十月〇日 b／十月〇日 c／十月〇日 d	TC 東 01	IL 東 02
広東進軍抄 海と兵隊（3）	19381222	1	十月〇日 e／十月〇日 f	TC 東 01	IL 東 03
広東進軍抄 海と兵隊（4）	19381223	1	十月〇日 g	TC 東 02	IL 東 04
広東進軍抄 海と兵隊（5）	19381224	1	十月〇日 h／十月〇日	TC 東 02	IL 東 05
広東進軍抄 海と兵隊（6）	19381225	1	十月十二日	TC 東 02	IL 東 06
広東進軍抄 海と兵隊（7）	19381227	1	十月十二日（つゞき）	TC 東 02	IL 東 07
広東進軍抄 海と兵隊（8）	19381228	1	十月十二日（つゞき）	TC 東 02	IL 東 08
広東進軍抄 海と兵隊（9）	19381229	1	十月十二日（つゞき）／十月十三日	TC 東 02	IL 東 09
広東進軍抄 海と兵隊（10）	19381230	6	十月十三日（つゞき）	TC 東 02	IL 東 10
広東進軍抄 海と兵隊（11）	19381231	6	十月十三日（つゞき）／十月十四日	TC 東 02	IL 東 11
広東進軍抄 海と兵隊（12）	19390101	6	十月十四日（つゞき）	TC 東 02	IL 東 12
広東進軍抄 海と兵隊（13）	19390102	6	十月十四日（つゞき）	TC 東 02	IL 東 13
広東進軍抄 海と兵隊（14）	19390105	1	十月十四日（つゞき）	TC 東 02	IL 東 14

広東進軍抄 海と兵隊 (15)	19390107	1	十月十五日	TC 東 02	IL 東 15
広東進軍抄 海と兵隊 (16)	19390108	1	十月十五日 (つゞき)	TC 東 02	IL 東 16
広東進軍抄 海と兵隊 (17)	19390110	1	十月十五日 (つゞき)	TC 東 03	IL 東 17
広東進軍抄 海と兵隊 (18)	19390111	1	十月十五日 (つゞき)	TC 東 03	IL 東 18
広東進軍抄 海と兵隊 (19)	19390112	1	十月十六日	TC 東 03	IL 東 19
広東進軍抄 海と兵隊 (20)	19390113	1	十月十六日 (つゞき)	TC 東 03	IL 東 20
広東進軍抄 海と兵隊 (21)	19390114	1	十月十七日	TC 東 03	IL 東 21
広東進軍抄 海と兵隊 (22)	19390115	1	十月十七日 (つゞき) / 十月十八日	TC 東 04	IL 東 22
広東進軍抄 海と兵隊 (23)	19390117	2	十月十八日 (つゞき)	TC 東 04	IL 東 23
広東進軍抄 海と兵隊 (24)	19390118	2	十月十八日 (つゞき) / 十月十九日	TC 東 04	IL 東 24
広東進軍抄 海と兵隊 (25)	19390119	2	十月十九日 (つゞき)	TC 東 04	IL 東 25
広東進軍抄 海と兵隊 (26)	19390120	2	十月十九日 (つゞき)	TC 東 04	IL 東 26
広東進軍抄 海と兵隊 (27)	19390121	1	十月十九日 (つゞき)	TC 東 04	IL 東 27
広東進軍抄 海と兵隊 (28)	19390122	2	十月十九日 (つゞき)	TC 東 04	IL 東 28
広東進軍抄 海と兵隊 (29)	19390124	2	十月十九日 (つゞき) / 十月二十日	TC 東 05	IL 東 29
広東進軍抄 海と兵隊 (30)	19390125	3	十月二十日 (つゞき)	TC 東 05	IL 東 30
広東進軍抄 海と兵隊 (31)	19390126	3	十月二十日 (つゞき)	TC 東 05	IL 東 31
広東進軍抄 海と兵隊 (32)	19390127	3	十月二十日 (つゞき)	TC 東 05	IL 東 32
広東進軍抄 海と兵隊 (33)	19390128	3	十月二十日 (つゞき)	TC 東 05	IL 東 33
広東進軍抄 海と兵隊 (34)	19390129	3	十月二十日 (つゞき)	TC 東 05	IL 東 34
広東進軍抄 海と兵隊 (35)	19390131	3	十月二十一日	TC 東 05	IL 東 35
広東進軍抄 海と兵隊 (36)	19390201	3	十月二十一日 (つゞき)	TC 東 05	IL 東 36
広東進軍抄 海と兵隊 (37)	19390202	3	十月二十一日 (つゞき)	TC 東 06	IL 東 37
広東進軍抄 海と兵隊 (38)	19390203	3	十月二十一日 (つゞき)	TC 東 06	IL 東 38
広東進軍抄 海と兵隊 (39)	19390204	3	十月二十一日 (つゞき)	TC 東 06	IL 東 39
広東進軍抄 海と兵隊 (40)	19390205	3	十月二十一日 (つゞき)	TC 東 06	IL 東 40
広東進軍抄 海と兵隊 (41)	19390207	3	十月二十一日 (つゞき)	TC 東 06	IL 東 41
広東進軍抄 海と兵隊 (42)	19390208	3	十月二十二日	TC 東 06	IL 東 42
広東進軍抄 海と兵隊 (43)	19390209	3	十月二十二日 (つゞき)	TC 東 07	IL 東 43
広東進軍抄 海と兵隊 (44)	19390210	3	十月二十二日 (つゞき)	TC 東 07	IL 東 44
広東進軍抄 海と兵隊 (45)	19390211	3	十月二十二日 (つゞき)	TC 東 07	IL 東 45
広東進軍抄 海と兵隊 (46)	19390214	3	十月二十二日 (つゞき) / 十月二十三日	TC 東 07	IL 東 46
広東進軍抄 海と兵隊 (47)	19390215	2	十月二十三日 (つゞき)	TC 東 07	IL 東 47

[表 2] 「広東進軍抄」『大毎』掲載状況

タイトル	掲載日	面	日付け(小見出し)/写真キャプション	タイトルカット	挿絵
海と兵隊 広東進軍抄(1)	19381219	11	十月〇日 a / 十月〇日 b 写真：広東の火野葦平軍曹(本紙特派員撮影)	なし	IL 大 01 (IL 東 01)
海と兵隊 広東進軍抄(2)	19381220	11	十月〇日 c / 十月〇日 d / 十月〇日 e 写真：上陸先陣を承はる勇士を甲板に集めて注意(松尾特派員撮影)	なし	IL 大 02 (IL 東 02)
海と兵隊 広東進軍抄(3)	19381221	11	十月〇日 f / 十月〇日 g 写真：敵前上陸を前の皇居遙拝(松尾本社特派員撮影)	なし	IL 大 03* (IL 東 04)
海と兵隊 広東進軍抄(4)	19381222	11	十月〇日 h / 十月〇〇日 写真：舟艇に乗ってバイアス湾を進撃する勇士(松尾本社特派員)*	TC 大 01 (TC 東 02)	IL 大 04 (IL 東 05)
海と兵隊 広東進軍抄(5)	19381223	11	十月十二日 (写真：なし)	TC 大 01 (TC 東 02)	IL 大 05 (IL 東 06)
海と兵隊 広東進軍抄(6)	19381224	11	十月十二日(つゞき) 写真：弾薬箱を肩に進撃する勇士(バイアス湾付近にて)(山上特派員撮影)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(7)	19381225	11	十月十三日 写真：炎天下の行軍に砂糖黍を啜つて渴を凌ぐ(平野特派員撮影)	なし	IL 大 06* (IL 東 08)
海と兵隊 広東進軍抄(8)	19381226	11	十月十四日 写真：惠州へ進撃するわが勇士(水足特派員撮影)	なし	IL 大 07* (IL 東 10)
海と兵隊 広東進軍抄(9)	19381227	11	十月十四日(つゞき) 写真：自転車をかついで難行軍する勇士(山上特派員撮影)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(10)	19381228	11	十月十五日 写真：重い荷物を背負うて煙草の勇士(松尾特派員撮影)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(11)	19381229	7	十月十五日(つゞき) 写真：堂々軍旗を奉じて進撃する皇軍(山上特派員撮影)	なし	IL 大 08* (IL 東 09)
海と兵隊 広東進軍抄(12)	19381230	11	十月十六日 写真：敵のトーチカ(浅井特派員撮影)	なし	IL 大 09 (IL 東 07)
海と兵隊 広東進軍抄(13)	19381231	7	十月十七日 (写真：なし)	なし	IL 大 10* —
海と兵隊 広東進軍抄(14)	19390102	2	十月十八日 (写真：なし)	なし	IL 大 11 (IL 東 11)
海と兵隊 広東進軍抄(15)	19390104	2	十月十九日 (写真：なし)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(16)	19390105	2	十月十九日続き (写真：なし)	なし	IL 大 12 (IL 東 18)
海と兵隊 広東進軍抄(17)	19390106	2	十月十九日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 13* (IL 東 14)
海と兵隊 広東進軍抄(18)	19390108	2	十月十九日つゞき / 十月二十日 (写真：なし)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(19)	19390109	2	十月二十日続き (写真：なし)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(20)	19390110	2	十月二十日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 14 (IL 東 15)
海と兵隊 広東進軍抄(21)	19390111	2	十月二十日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 15 (IL 東 16)
海と兵隊 広東進軍抄(22)	19390112	2	十月二十日つゞき (写真：なし)	TC 大 02 (TC 東 04)	なし
海と兵隊 広東進軍抄(23)	19390114	2	十月二十日つゞき (写真：なし)	TC 大 02 (TC 東 04)	IL 大 16 (IL 東 17)

海と兵隊 広東進軍抄(24)	19390115	2	十月二十一日 (写真：なし)	なし	IL 大 17 (IL 東 23)
海と兵隊 広東進軍抄(25)	19390116	2	十月二十一日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 18 (IL 東 25)
海と兵隊 広東進軍抄(26)	19390117	2	十月二十一日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 19 (IL 東 24)
海と兵隊 広東進軍抄(27)	19390118	2	十月二十一日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 20 (IL 東 27)
海と兵隊 広東進軍抄(28)	19390120	2	十月二十一日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 21 (IL 東 36)
海と兵隊 広東進軍抄(29)	19390121	2	十月二十一日つゞき 写真：最近の火野葦平軍曹(広東海珠橋畔)	なし	なし
海と兵隊 広東進軍抄(30)	19390122	2	十月二十一日つゞき (写真：なし)	TC 大 03 (TC 東 03)	IL 大 22 (IL 東 12)
海と兵隊 広東進軍抄(31)	19390123	2	十月二十一日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 23 (IL 東 34)
海と兵隊 広東進軍抄(32)	19390124	3	十月二十二日 (写真：なし)	TC 大 02 (TC 東 04)	IL 大 24 (IL 東 33)
海と兵隊 広東進軍抄(33)	19390125	3	十月二十二日つゞき (写真：なし)	TC 大 02 (TC 東 04)	IL 大 25 —
海と兵隊 広東進軍抄(34)	19390126	3	十月二十二日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 26 (IL 東 29)
海と兵隊 広東進軍抄(35)	19390128	2	十月二十二日つゞき (写真：なし)	TC 大 04 (TC 東 05)	IL 大 27 (IL 東 37)
海と兵隊 広東進軍抄(36)	19390129	2	十月二十二日つゞき (写真：なし)	なし	IL 大 28 (IL 東 19)
海と兵隊 広東進軍抄(37)	19390130	2	十月二十三日 (写真：なし)	なし	IL 大 28 —

初出の『東日』版と『大毎』版では、トータルで掲載された『広東進軍抄』本文に変わりはないが、掲載回数をはじめ、多くの差異がみられた。こと、『広東進軍抄』が新聞連載小説であることを考慮すれば、挿絵や写真をはじめとした文字以外の要素やレイアウトの差異は、紙面構成の方向性、企図された対読者効果などに大きく関わり、検討すべき課題は多く、注目に値する。こうした新聞紙面上の差異については、他日、別稿で検討することとしたい。

Ⅲ 単行本『広東進軍抄』の概要と広告文

「広東進軍抄」連載終了後まもなく、短編「煙草と兵隊⁽¹⁸⁾」(『文芸春秋』昭14・1)とあわせて、単行本『広東進軍抄 附・煙草と兵隊』(新潮社、昭14)が刊行される。装幀は九州出身の画家で『九州文学』表紙も描いた星野順一、題簽は小倉出身の小説家で『九州文学』同人の劉寒吉、ほかに広東省を中心とした地図、本文中には写真27枚が添えられている([表3]参照)。写真は新聞掲載版と同じものは3枚、そのほかは「著者・日日新聞写真部」というクレジットもあるように、両者が撮影したものが新たに掲載されている。

単行本掲載の写真を軸に、[表3]をまとめた。写真の掲載順に「No」をふり、「ページ」、当該写真が掲載された場面の「日付け」、「キャプション」を示し、『大毎』掲載写真が流用されたとおぼしきものについては、初出時の掲載回を示した。

[表3] 『広東進軍抄』 写真掲載状況

No	ページ	日付け	キャプション	【大毎】掲載
1	3	—	広東中山大学前に於ける著者	(1)
2	9	十月〇日 a	—	—
3	17	十月〇日 c	船中に於ける火野軍曹(右より二人目)	—
4	33	十月〇日 g	敵前上陸を前に皇居遙拝	(3)
5	39	十月〇日 h	—	—
6	47	十月十二日	船艇に乗つてバイヤス湾を進撃する勇士	—
7	49	十月十二日	バイヤス湾上陸第一歩刹那(手前の兵は船の綱を曳いてゐる)	—
8	51	十月十二日	バイヤス湾に上陸完了の〇〇部隊	—
9	59	十月十二日	上陸後直ちに砲撃を開始した〇〇部隊勇士	—
10	67	十月十三日	小休止	—
11	75	十月十四日	重い荷をかついで通信隊の進撃	—
12	81	十月十四日	自転車をかついで難行軍	(9)
13	91	十月十五日	敵のトーチカ	—
14	99	十月十五日	惠州入城の皇軍	—
15	117	十月十八日	—	—
16	131	十月十九日	友軍の砲撃	—
17	143	十月二十日	休憩	—
18	149	十月二十日	果敢なる突撃	—
19	155	十月二十日	歩道に休む勇士	—
20	159	十月二十日	急設の〇〇隊本部	—
21	167	十月二十一日	広東附近の防空壕	—
22	185	十月二十一日	出動の戦車隊	—
23	191	十月二十一日	南支死守の支那兵(広東の街はづれに捨てられたあつたブリキ製の人形)	—
24	195	十月二十二日	わが荒鷲の広東爆撃	—
25	197	十月二十二日	見事な爆撃のあと	—
26	201	十月二十二日	広東恵愛路を行軍する〇〇部隊	—
27	205	十月二十二日	広東省政府を占領した〇〇部隊の万歳	—

以下、単行本『広東進軍抄』刊行時の広告文を参照しておく。

新潮社「広告 火野葦平著／広東進軍抄」(『東京朝日新聞』昭14・3・11)は、次のようなものである。

「麦と兵隊」と「土と兵隊」を以て日本の読書界を席卷した作者の第三作！

上陸！ 上陸！ そして旋風の如く進軍！ 更に撃滅！

戦ふ人間と美しき自然と共いきづく一つの呼吸を紙上に聞く日本が世界に誇り得る戦争文学はこれだ！

戦史空前の奇襲を以て全世界を驚倒せしめた広東戦の全貌は、日記体に委曲を悉された。
 著者は、幾度も炎熱下に昏倒し幾度も弾雨下に死を決して、尚ほも書き続けたのだ。この涙ぐましい、そして物凄い努力に誰か頭を下げずにみられよう。真に一字一句に血と汗が輝いてゐる。
 久米正雄氏曰く火野文学の精華正にこの一卷にある！（1面）

作品内容を顕揚する以前に、やはり新潮社も（「花と兵隊」を意識して）『広東進軍抄』を、火野の《第三作》として位置づける。その上で、戦場を体験した書き手の火野葦平をクローズアップしながら、同作がヒューマンリズムをあわせもった《戦争文学》の傑作であることを強調していく。引用部最終行に言及された久米正雄のコメント全文は、次に引く新潮社「広告 火野葦平著／広東進軍抄」（『東京日日新聞』昭14・3・12）にも掲載される（上記広告との重複部分は省略し、久米コメントのみ引用する）。

久米正雄氏曰く

『広東進軍抄』で火野君の戦記文学は、素晴らしく円熟した簡素な形態に、彼が潜ませた技巧の用意が、行間に溢れてゐる。迫真的実感が、最大の戦果を拡大してゐる。一読三嘆せざるを得なかつた。

今一本となつて纏めて読み其感一層深い。どうか東日・大毎で一読した人人も再読して火野文学の醍醐味に味到せられたい。（1面）

ここで久米は、『広東進軍抄』における《形態》（日記形式）や《技巧》、つまり火野の文学作品としての側面に論及し、その成果として《迫真的実感》が生じていると判じている。さらには、すでに新聞で読んだ読者にも、書物として《纏めて読》んで《火野文学の醍醐味》に触れることを推奨している。

このように、単行本とそのパラテキストを確認してみると、単行本版『広東進軍抄』が初出版版「広東進軍抄」に比べて、連続した読書が可能であるということのほかにも、写真が多く掲載されており、広東戦の実情を伝えようとする、報告文学としての色彩が濃くうちだされている。

Ⅳ 火野葦平『広東進軍抄』同時代受容

本節では、初出が新聞（新聞連載小説）ということもあって、その全容がつかみにくい『広東進軍抄』同時代受容の様相を、調査－分析－考察していきたい。

当然のことながら、新聞社－出版社は、「麦と兵隊」、「土と兵隊」に次ぐ火野葦平の戦争文学として『広東進軍抄』を高く評価していたが、折からの火野葦平ブームがあつたにもかかわらず／それゆえに、『広東進軍抄』発表－刊行直後の評価には否定的なものが多い。

たとえば、村上雄策は「時事評論 ギャナリズムの弊風」（『廓清』昭14・1）において、火野個人の問題というよりはジャーナリズムの弊害として、次のように論難していく。

近頃火野葦平といふ人の小説らしいものが人気を博して来ると。丸で熱病に取り付かれたやうに我れも――と喧ぎ立てる。文芸春秋に毎月何か長篇ものが出て居るかと思ふと、朝日に花と兵隊、日々に海と兵隊が出るといふ現象、書く方も何うかと思ふが、こんなにまでして書かせる方も正気の沙汰ではない。近頃の日本は何うかして居る。（27頁）

同様の見解は、H・S・S「戦争を喰ふ新聞——新聞匿名月評——」（『文芸春秋』昭14・2）において

も、次のように示される。

火野葦平は如何に偉大な、また時代的な作家であらうとも、この国のジャーナリズムが彼一人を追っかけ廻すといふことは、決して褒めた行動ではない。視野が固定し、鑑識眼が義眼化した証拠で、新発見と新発展のため心細い限りではないか。第一火野葦平も名実共に瘦せてしまふ。文学を育てる道でもないのだ。東朝の『花』と東日の『海』とが、『麦』と『土』に次ぐ三部作だと争ふ如きは、愈々以て世紀末的現象であらう。(241～242頁)

ここには、火野が「解説」で《不気味なもの》と振り返った第三作争奪戦を繰り広げる新聞社の動向が《世紀末的現象》と批判されている。これを読者の立場から捉えると、無署名「読んだものから」(『三田文学』昭14・2)における、「『海と兵隊』『花と兵隊』『煙草と兵隊』あゝ、遂にとどまるところを知らず」、《名実共に長期抗戦を「文」でいつたもの、然し、毎日新聞に連載される「兵隊もの」も、どうやらもう食傷した感じなり》(173頁)ということになるだろう。《今度の事変が生み出した作家は火野葦平と上田廣である》(104頁)と断じる朝倉秀雄も、「現代文壇鳥瞰図(一)——流行作家への瞥見——」(『国語教育』昭14・3)において、次のように火野ブームの弊害に論及していく。

事変の記憶と共に残る作品と云へば、現在の所只一つ「麦と兵隊」があるだけであるが、火野葦平は元来下手な作家だ。〔略〕たくましい精神は見受けられるが、細かく行届いた神経は探したつて出て来ない。〔略〕あれから次々と発表された「土と兵隊」「海と兵隊」「花と兵隊」が次々に魅力を失つてゆく原因は此の辺にあるのかも知れない。(105頁)

こうして、ジャーナリズム／火野に向けられる視線は、次第に兵士としての火野の職分を問うようになくなっていく。次に引く、無署名「簾視壁聴」(『日本及日本人』昭14・2)がその一例である。

麦と兵隊、土と兵隊、海と兵隊、花と兵隊、煙草と兵隊、酒と兵隊、馬と兵隊、金と兵隊、女と兵隊、兵隊と兵隊……何処までいつても、標題に苦しまぬ兵隊ばやりの世の中となつた▲火野葦平といふ兵隊サンは、どんな兵隊サンか知らぬが、観戦記者か何かなら知らぬこと、皇軍の一人として、何時でも名誉の戦死をする覚悟を以てゐる皇軍の一人として、まさか原稿書きに従軍してゐるのでもあるまいに、サリとはあまり暇がありすぎるのではないか▲たとひ暇があつたにしたところで、厳しい軍律の中で、小説の原稿を書いてゐるなぞは、少し気をつけたらよからう。何も小説を書くのが悪いとはいはぬが、現役軍人として、千古未曾有の非常時局の真只中に踊り込んで、重大な戦争に従事してゐる身として見れば、原稿稼ぎとしか思はれぬやうな遣り方は、自から慎むべきであらう(128頁)

こうした一連の同時代評においては、作品の検討も一部なされはしたものの、大半は節度なく火野に書かせるジャーナリズムと、兵隊でありながら乱作をしている(ようにみえる)火野とが、その姿勢において批判された⁽¹⁹⁾。その表徴こそが、「○○と兵隊」という火野の戦争作品タイトルだろう。

もちろん、火野の力量とジャーナリズム(の動向)とを峻別した、河上徹太郎「新年号の戦争物」(『文学界』昭14・2)のような議論もある。《氏は最近朝日と日日に「花と兵隊」「海と兵隊」の二作を同時に連載してゐる》と火野の状況にふれる河上は、《まだ初めの方だけで批評する程のものではないが、兎に角軍務に服してゐ乍らかういふ仕事をする力があるのは驚嘆すべきことである》として、次のように論じている。

人或ひは氏をかくまでに酷使するジャーナリズムの魔手を非難するだらうか？ 然し氏の作家的能力は普通の文壇小説家の如き感受性の推積や描写力の集中などで出来てゐるのではなく、一種独特なはりから出てゐるのである。それが偶々戦争といふ豪華な純潔な事件にぶつかつて光彩を放つてゐるのであつて、普通の作家が無理に机の前で絞り出してゐるのとは違つてゐる。だから氏がジャーナリズムの追求によつてどれだけ疲らされるかは、今の所私は余り恐れてゐない。只ジャーナリズムによつてどれだけ汚されるかは、之は亦別問題であるが。(171 頁)

他方、作品として『広東進軍抄』を検討し、肯定的に評価した同時代評もある。一部が単行本広告にも引用された飯島正「近刊愛書メモ 考へる葦平」(『東京朝日新聞』昭14・3・20)は、次のように新聞連載時と単行本との読書体験の落差にふれて、作家の変化にまで論及していく。

火野葦平氏の「海と兵隊」は新聞に連載中おもしろくなくなつて読むのをやめたが「広東進軍抄」と改題出版されたものを一気に読むにおよんで、一貫した気魄を感じ、やはり、これは第一流の戦争文学であると、ふかくおもつた。こゝにあらはれてゐる火野葦平は、やうやく「見る」——あるひは「感じる」——から「考へる」火野葦平にうつりつゝある。

それだけに、平明で、沈着で、進軍のはやさを文学のふかさにかへてゐる点、あきらかに前作よりの進歩を見せてゐる。(4 面)

新聞連載時には、日記形式で書かれた「広東進軍抄」の一日の出来事が、数日にわたつて分載されることも多く、一般の新聞小説に比しても、断片化されていた印象は否めない。それが単行本になると、《一気に読む》ことが可能となり、そこに《一貫》して流れる作家性が感じとれたというのだ。

類似した読書体験は、無署名「新刊巡礼 広東進軍抄(火野葦平著)」(『三田文学』昭14・6)においても言明されている。《「広東進軍抄」は、「海と兵隊」として、東日紙上に連載されたものであるが、かうして一本にまとめて、「麦と兵隊」「土と兵隊」と共に読み返してみると、一層興味深いものがある》(190 頁)という同文では、《直接に生死の問題である戦争の現実と筆者火野葦平が闘ふ兵隊の一人であることは、我々を理性に止めて置くことは出来ない》、と書き手である火野葦平の立場・状況に対して畏敬に近い敬意を表しつつ、次のように述べていく。

特派員達の記事が、その真迫性に於て、戦士である彼に及ばないのは当然であるが、この攻略戦に於て程圧倒的であつたことはない。余りに迅速で、トピックとして我々に訴へて来るものがなかつたものが、一度彼の手にかゝると、生生とよみがへつて来るのは、何故であらうか。勿論秀れた描写力の為ではあるが、この烈しい現実から彼が表現し強調してゐるものは、日常性、戦場の日常性とでも云つたものではないだらうか。「土と兵隊」「麦と兵隊」を文学として輝かしてゐたものが、巧みに運用されてゐる様に思ふ。(191 頁)

もとより、『広東進軍抄』を作品として分析的に読み、その結果、否定的な評価に至る、三角俊一郎「新中国文学の課題および方法論」(『北支那』昭14・4)のような同時代評もある。火野の作品群を評価する三角は《火野葦平にも数々の失敗はある》として、《たとへば『海と兵隊』——広東進軍抄——の数場面に繰返して現はれる描写形式であるが、それは、強行軍で疲労の極にある兵隊が、ひとたび突撃となるともろもろの感傷や憂慮をふつとばして、予想外に果敢なことにたいする作者のおどろき》(15 頁)に注目する。こうしたたびたび書かれる場面を、三角は次のように論評する。

この場合、作者の主観的な空白は、いさゝか誇張されてをり、演説みたいな性格を帯てゐて、そのすぐ前に描かれてゐる突撃の表現がごくリアルなものであるにかゝらず、人びとをして、一律に感動にまで同化させることがない。なぜだらう。写実が内燃し、立体化する以前に、饒舌とセンチメントとがのうのうととび出したせいである。内容過材の一つの例であらう。(16頁)

ここで三角は、『広東進軍抄』を、戦場の様相を描く写実的なパートと、兵隊への感嘆を表白するパートの二層構造と捉え、後者が作品全体のトーンを壊すほどの自己主張である点を難じる。

とはいえ、こうした局面は、進行中の戦争を報告する作品でもある『広東進軍抄』にあつては、小説としての結構ばかりでなく、銃後の読者(国民)のナショナリズムを刺激する急所でもあつた。

たとえば、杉山平助は「火野葦平論」(『改造』昭14・10)において、「『広東進軍抄』の中の難行軍の一節は、彼の文章のうちでも、最も卓越した部分である」、《この行軍のうちに、彼は曾つての自分の部下であつた分隊が、埃にまみれ、ほとんど死にさうになつてもなほ倒れず、無言で行進して来るのに出あふ》と、「十月十八日」の場面を紹介しながら、感動のポイントを次のように論じていく。

「皆元気か」

と路ばたに立つて云つたきり、彼は、胸が迫つて何も云へなかつた。あとには涙が溢れて来るばかりであつた。このやうな力闘感といふものは、人間がこの世に生きてゐるうち、いくたびとは味へない。生涯の一絶嶺をなすものである。そして、そこにあるのは涙だけだ。誰もこれを男性的でないといふことは出来ない。真の男性が、はじめて知る涙である。私も、これを読んで泣いた。

そして、近頃の文学で、かういふ種類の感銘力は、きはめて珍しいものだと思つた。

葦平の戦記には、この種の精神が、千差万別の形において表現されてゐる。そして、この精神は、彼が祖国に残して来た、親と妻と子とへの思慕につながり、そしてそのまゝ、祖国の愛情へつながる大動脈なのである。

火野葦平が人の親であるといふ事実は、この戦記を読むものゝ、絶対に忘れてはならない条件だ。(311頁)

同様に、相馬御風も「同拝同行」(『土に訴る』人文書院、昭14)において、新聞連載中の「広東進軍抄」における「十月二十一日」の場面(頭上から手を振る日本の飛行機に、兵隊が日章旗を振って応じる様子を見て、「私」が「この美しい旗のために死ぬことの悔なさを惻々と胸に感じ」る場面)を読んだ際に、《思はず「そこだ!」と叫んで膝を打つた》として、次のようにつづける。

この感激! この歓喜

これこそ最高最貴の法悦境でなくて何であらう。絶対帰依の歓喜境とはこれをこそ指すのであらねばならぬ。

日本の民の大安心境は正に太陽の光に照らされて、こゝにその真姿を顕現したのである。(8~9頁)

こうした『広東進軍抄』受容のあり方(の一つ)は、中谷孝雄『戦争文学の新研究』(日本文学学会、昭15)にきわまる。《「麦と兵隊」や「土と兵隊」に描かれた日本兵士の行為は、ほとんど涙なしには読まれないやうな美しいものと言つてよい》、《その美しさといふのは、いはゆる日本的性格といふものである》(4頁)と前置きした上で、「広東進軍抄 海と兵隊」についても、次のように論じる。

このやうな涙は、人間の最も崇高な涙と言ふべきであらう。彼の戦記には、このやうな感激的な場面が、この種の精神がいろいろの形に於いて表現されてゐる。そしてこの精神が、肉親への愛とつながり、更にそのまま祖国への愛情とつながつてゐるのである。(6頁)

ここにおいて、新聞／単行本という媒体を通じて読者に読まれた『広東進軍抄』は、前線と銃後を、国民という共同性ばかりでなく《美》によって媒介し、プロパガンダとしての役割を十全に果たしていく。その際、小説の書き手があの火野葦平であることは大前提である。

書き手が火野葦平であることの意義とは、たとえば、尾崎士郎が「戦争文学一家言——その存在と意義について」(『裸』金星堂、昭14)において示す、次の評価によっても明らかだろう。

今日の文学常識をもつてすれば、所謂戦争文学の出現に対するジャーナリズムの要望に的確な形式と内容をもつて答へたものは火野葦平氏の「麦と兵隊」である。この作品が国民的感情を刺戟した理由はいろいろな角度から探しだすことができるであらうが、重要なことは作者が直接戦闘に参加した一兵士であるといふ認識がすべての解釈の根幹をなしてゐるといふことである。(268頁)

このような書き手による作品が、銃後でどのように受容されたか、尾崎は次のように述べている。

「麦と兵隊」——ならびに同じ作者による一連の作品があれだけの反響をよび起したといふことは、第一に作者が戦争の時間的認識の上に立つて制作しなければならぬやうな運命と環境の下に生活してゐたこと、第二に時間を表現するための形式がもつとも単純にして素朴な私小説的条件を備へてゐたこと。——これを引つくるめて言へば、作者の体験が個人的感情に基く報告によつて一層実感を深めたといふととになるであらう。(270～271頁)

こうした作家・作品に対する尾崎の高い評価は、しかし、次のように次第にトーンダウンしていく。

しかし、それが「花と兵隊」「海と兵隊」其他の近作に移ると、読者の感銘は次第に変化して、戦つてゐる作者よりも、ペンを動かしてゐる作者、言ひかへると執筆に充分な余裕の下に戦闘に参加してゐる作者、もう一步踏込んで言へば戦闘のあひ間あひ間に時間を盗むやうにして執筆してゐる作者よりも、執筆の余暇を得ては戦闘に従事してゐる作者の姿がうかんでくる。実際にはそんな途方もないことのあり得る筈もないのであるが、表現の上にはあらはれた肉迫感において「麦と兵隊」の中にひそんでゐた切実な時間的認識が失はれてゐるのである。(271頁)

こうして『広東進軍抄』は、戦場に身をおく火野による、報道的な側面を多分にもった報告国文学として受けとめられつつ、一定以上の支持が表明された反面、その多作ぶりなどを根拠とした批判的な見方も同時に示された。つまり、「麦と兵隊」や「土と兵隊」のような圧倒的な評価に包まれることはすでになく、『広東進軍抄』-火野葦平評価は、落ち着きを見せはじめたといつてよい(同様の傾向は、「花と兵隊」の同時代受容にもみられる)。ただし、こうした評価(の変化)は、単に「麦と兵隊」や「土と兵隊」に比した文学的価値の下落というよりは、むしろ、作品個々に内在的な文学性とは異なる作品をめぐる諸条件の変化によつてもたらされた現象のように見える。ここにいう諸条件とは、火野の乱作の印象や報告文学の量的増加、日中戦争開戦からの時間的経過、等々である。

V 本文／展望

書誌事項の整理を軸に『広東進軍抄』の基礎的検討を目指す本稿のタスクは、前節までに一通り果たされた。最後に、展望を兼ねて、『広東進軍抄』における「兵隊」の書き方について検討しておく。

『広東進軍抄』執筆の動機に関わっては、栗林農夫「広東陣中の火野葦平」（『大陸』昭14・3）で紹介された、火野葦平の発言から参照しておきたい。同文には、次のやりとりが紹介されている。

「こんどのはどんなテーマなんです」

「テーマといふものがないんでね、もつともテーマがないとふことも面白いことですがね。僕は今度落伍ばかりしてゐたんでね、まあ落伍者の手記とでもいつたもんですね。」

火野氏は一寸苦笑した。

「落伍者の記も面白いぢやないですか、落伍も兵隊だからな、題はなんとつけました」

「今度は記録的な意味が多分にあるんでね、考へたがいゝ題もないし「広東進軍抄」としようと思つてゐます。自分が戦闘部隊の中にゐなかつたからあまり兵隊のことは書けないんだが、たゞ僕は今度こそ日本の兵隊の強さといふものに実に驚いたね、なんしろあの行軍でせう。あれを十日間もその上も戦闘しながら続けたといふことは驚くべきことですね、まあ日本の兵隊といふものはどこまで強いんだらうと思ひましたね、今度はそいつを力を入れて書いて見たいですね」

今度の行軍の偉さといふことについては私も大本営報道部から派遣された松村中佐からきかされてゐた。一日や二日ならとにかく戦闘行軍を一日六、七里ものスピードで十日余も続けたといふことは世界戦史にもない記録的な驚異だといふことだ。（99頁）

ここで火野が語ったことによれば、『広東進軍抄』の主題は兵隊——それも「日本の兵隊の強さ」ということになる。確認にはなるが、以下、『広東進軍抄』における兵隊がどのように書かれているのか、検討しておきたい。まずは、『広東進軍抄』冒頭部、上陸前の海上生活の一節を次に引く。

十月〇日、黄濁した海水が、次第に青味を帯び、青味をふかめて来ると、次第に暑さが増してきた。次第に波のうねりが激しく、次第に船が揺れ始め、次第に兵隊が閉口し始めた。森々と水平線ばかりの海洋を進航して行く数百隻の商船団と、軍艦とに平行して、渡り鳥が海洋を飛んで行つた。それは雀か燕のやうな小さい鳥で、五、六羽づつ列をなし、高く飛び上つたり、低く波とすれへ下つたりして、甚だ頼りない飛び方に見えるのだが、私その鳥類の意志に驚いたのである。時々羽を休めるやうに、マストに来て止つたり、電線に降りたりするが、滅多には小休止もせず、ヒラ〜と風の中のごみのやうに見えるものが、はてしなき森々たる海原を渡つて行く。（『広東進軍抄 海と兵隊（1）』、『東京日日新聞』昭13・12・20夕、1面）

ここで「私」が視界に収め、書きとめた「渡り鳥」の様相は、すぐさま「それはもとよりわれわれ兵隊自身の気持ちに外ならなかつたのである」（同前）と意味づけられる。つまり、休まずに「意志」をもって海上を飛んでいく「渡り鳥」は、広東攻略を目指していく日本の兵隊の代理-表象であり、その示的な姿なのだ。しかも、こうした兵隊たちは、日中戦争開戦以来、長らく戦場を馳駆してきていた。

そうしたエピソードは、「私」が「土と兵隊」に言及しながら次のように綴っている。

私は、そこはかとなく、一年前のことを思ひ出す。私はその時のことを、『土と兵隊』といふ文

章の中で書いたが、今この熱帯の海上を、広東攻略のために進航して行く兵隊は、その時と同じ兵隊である。さうして、何もかもが同じである。あの時と同じやうに、涯しない海の上を無数の兵隊を満載した輸送船隊が進み軍艦が護衛している。「(「広東進軍抄 海と兵隊 (4)」、『東京日日新聞』昭13・12・23夕、1面)

こうして故国を離れて転戦する兵隊の移動にふれた後に、「私」は兵隊の変化に言及していく。

しかし、実は、私は、あまりに違つてゐる。殊に先刻から感慨を禁じ得ずにあるのである。それはそこらにゴロ／＼と転がつてゐる兵隊である。これは一年前に杭州湾に出かけて行つた同じ兵隊でありながら、今こゝにある兵隊は、その時の兵隊と全く同じではない。これは全く違つてゐるやうにさへ見える。私はその理由をこゝで述べる必要があるであらうか。

一年間の戦場の生活が兵隊をこんなにも変へてしまつた。彼らは見違へるばかり遅しくなつた。いま目の前に、太々しくゴロ寝をしてゐる兵隊、他愛もなく冗談口を叩きながらゲラゲラ笑つてゐる兵隊、一心に講談本や古雑誌に読み耽つてゐる兵隊、碁や将棋をさしてゐる兵隊、かういふ兵隊を見てゐると、私は、この船が凄惨な水際戦闘が行はれるかも知れない敵前上陸のために進航してゐるのだといふ厳肅なる事実を、ふつと見失ひ、悲壮になる。一年前には、不安に充たされた、もつと深刻な表情があつた。そんなものはどこにも見当らない。しかし私は、その無造作な兵隊達の投げやりな表情の中に、一層恐ろしいまでに、悲壮な感情に触れ、胸が痛くつてならなかつたのである。(同前)

「私」が感慨深く感じている兵隊の姿は、「何もかもが同じ」であり、しかも「全く違つてゐる」のだという。一年の月日による兵隊の変化をもたらしめているのは「遅しさ」であり、それを備給したはずの戦場経験である。くつろいだ姿をみせる兵隊が、命がけの戦闘をくぐり抜けてきたという二面性。

類似した兵隊の相貌は、別のかたちでも書かれていく。「十月十九日」、大亜湾から行軍していく兵隊の姿を、「私」は次のように描写する——「兵隊は道いつばいに溢れ、黄塵の中を歩いていく」、「これらの兵隊は歩いてゐるだけがやつとはないか」(「広東進軍抄 麦と兵隊 (28)」、『東京日日新聞』昭13・12・23夕、1面)。それでいて、同時に「私」は次のようなことにも想到していく。

炎熱の行軍で倒れんばかりになつて、足を引きずりながら歩いたこれら同じ兵隊がやつたのだ。数時間前の勇敢な戦闘も、これらの兵隊によつて行なはれた。私は私の錯覚を恥ぢる。私はこれらの歩く兵隊にもの恐ろしさを感じる。私ははげしく胸を衝たれ、臉が熱くなつて来る。又、この道に溢れて進軍して行く軍隊の姿は、祖国の水門から切つて落とされた一つの奔流のごとくに見える。止まるところを知らない流れのごとくに見える。この流れを解明することは兵隊の任務ではない。その流れとなることが兵隊の精神である。私の頬を涙が流れて来た。

疲弊しきつて歩いている兵隊たちが、「数時間前」には「戦闘」をしてきたという事実。そのような兵隊の力に「もの恐ろしさ」を感じる「私」は、そのようなことがなぜ彼らに可能になっているか、その力の根源をつきとめている——「この道に溢れて進軍して行く軍隊の姿は、祖国の水門から切つて落とされた一つの奔流のごとくに見える」。ここで「私」は、日本の兵隊を支えるものとして、その背後に祖国を見出し、また、兵隊の役割を「流れとなること」とみきわめ、意味づけていく。そして、それ以上の説明を言語化することなく、自身の感動を綴っていく——「胸を衝たれ、臉が熱くなつて来る」、「私の頬を涙が流れて来た」。こうした身体化された感動は、兵隊の姿と「祖国」という概念に由

来することは明らかだが、その具体的な結びつき（論理的因果関係）は空所とされている。にもかかわらず／それゆえに、同時代評によって検証したように、『広東進軍抄』の読者はこうした局面にナショナリズムを醸成されていく。その意味でいえば、『広東進軍抄』およびその書き手である火野葦平は、戦場を馳駆する兵隊の姿を内地の読者（国民）に報告する媒介者の役割を全うしたといえるはずだ。

もとより、そこには新聞紙面をはじめとした広東攻略に関する報道やほかの報告文学との意味論的連携や、『広東進軍抄』パラテキスト（挿絵、写真）の意味作用も考慮すべきである。これら諸点も視野に収めた『広東進軍抄』の同時代における意味作用の検討が、次の課題となる。

注

- (1) 昭和10年代における文学場の動向については、拙著『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』（ひつじ書房、令3）ほか参照。
- (2) 馬淵逸雄「戦争と文芸」（『報道戦線』改造社、昭16）、441頁。
- (3) 古谷綱武「火野葦平論」（『中央公論』昭14・7）には、『戦記ものを書きだしてからの火野葦平は、つまり戦場の体験を経てきた火野葦平は、自分は自分独特だといふ自分の周囲の垣をとりはらつて、一般大衆へのつよい親しみを抱き、そのひとたちへこぼりなく話しかけるのである』（274頁）という指摘がある。
- (4) 昭和戦前期における火野葦平の新聞連載小説としては、①「花と兵隊」（『東／西朝日』夕刊、昭13～14）、②「海と兵隊」（『東京日日／大阪毎日』、昭13～14）、③「怪談宋公館」（『南支日報』昭14）、④「美しき地図」（『朝日新聞』昭15～16）、⑤「陸軍」（『朝日新聞』昭18～19）、⑥「中津隊」（『西日本新聞』夕刊、昭19）がある。
- (5) 社会批評社編集部「解説」（火野葦平『海と兵隊 悲しき兵隊 [火野葦平戦争文学選第5巻]』社会批評社、平26）、199頁。
- (6) 神子島健「ひのあしへい 火野葦平」（吉田裕・森武磨・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、平27）、567頁。
- (7) すでに戦時期から、板垣直子が「火野葦平の作品」（『事変下の文学』第一書房、昭16）において『火野氏を代表する戦争文学はこの三部作である』（38頁）と、十返一が「火野葦平論」（佐藤春夫・宇野浩二編『近代日本文学研究 昭和文学作家論 下巻』小学館、昭18）において『我が戦記』三部作は、今日にあつても火野氏の評価を決定する最も根本的な作品である』（423頁）と評すなど、兵隊三部作への評価は定着していた。
- (8) 「麦と兵隊」以外の作品にまで論及した研究成果として成田龍一『増補（歴史）はいかに語られるか 1930年代「国民の物語」批判』（ちくま学芸文庫、平22）があるが、論及は兵隊三部作までにとどまっている。渡辺考『戦場で書く火野葦平のふたつの戦場』（朝日新聞出版、令2）でも、「兵隊三部作」にはまとまった論及がみられるが、『広東進軍抄』は作品名が1度示されるのみである。
- (9) 『戦争70年を読み直す 戦争と文学スペシャル』（集英社、平27）には、増田周子「火野葦平 「広東作戦」従軍手帳翻刻——陸軍報道班員の記した日中戦争——」と「解説」、さらに、浅田次郎「特別寄稿 時代の贄」が収録され、火野の従軍手帳が紹介されている。
- (10) 主要比較対象とされているのは、神原孝夫「快速部隊の足」（『文芸春秋 [時局増刊]』昭13・12）、堂「広東戦線従軍日記」（『雄弁』昭14・1）、堀川武夫「南支戦線報告書」（『改造』昭13・12）、水本安基「広東一番乗り」（『サンデー毎日』昭13・11・20）、末常卓郎「敵前上陸①～④」（『東京朝日新聞』昭13・11・8～12）である。
- (11) この間の経緯については、拙論「戦場にいる文学者」からのメッセージ——火野葦平「麦と兵隊」（『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平27）、「火野葦平「土と兵隊」の同時代的意義——日中戦争期における文学（者）の位置」（『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、平30）参照。なお、海外における火野葦平の流通に関して、渋谷豊「フランスにおける日本文学受容の一側面——火野葦平の場合」（『信州大学人文科学論集』平29・3）参照。
- (12) 板垣直子「火野葦平の作品」（『事変下の文学』前掲）、36～37頁。
- (13) 火野葦平「解説」（『火野葦平選集 第二巻』東京創元社、昭33）、429頁。
- (14) 注（13）に同じ、429～430頁。なお、「花と兵隊」については、拙論「戦場における“人間（性）”——火

野葦平「花と兵隊」序論（『日中戦争開戦後の文学場』前掲）、「新聞連載小説としての「花と兵隊」——火野葦平の小説／中村研一の挿絵」（『神奈川大学アジア・レビュー』令5・3）参照。

(15) 注(13)に同じ、430～431頁。

(16) 注(13)に同じ、431頁。

(17) 注(13)に同じ、431～432頁。なお、越前谷宏が「火野葦平『広東進軍抄』とその周辺——戦争と従軍記者」（『国文学論叢』令1・2）において、「この回想は、厳密な意味では正確ではない」と指摘し、次のように正している——《たしかに「花と兵隊」は、「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」ともに一月二〇日付け夕刊からの連載であり、「広東進軍抄」も、「東京日日新聞」は同じく一月二〇日付け夕刊である。「大阪毎日新聞」だけが一月九日朝刊から連載開始なので、「この半日の差を大事件として争うジャーナリズム」とした場合、「朝日が勝った」のではなく「大阪毎日新聞」が「勝った」となる。また、「東京日日新聞」は夕刊への掲載であったため、夕刊休刊日の影響があり、「大阪毎日新聞」よりとんど遅れていくことになる》（103頁）。

(18) 無署名「編輯後記」（『文芸春秋』昭14・1）において「煙草と兵隊」は、「麦と兵隊」「土と兵隊」と変つて、人間の火野の心情を率直に吐露する名作である》（432頁）と紹介された。

(19) 後に板垣直子も「火野葦平の作品」（『事变下の文学』前掲）において、『広東進軍抄』を《バイアス湾への上陸から、広東への進軍、殆ど無血に近い入城から警備へと筆が運ばれてゐる》と捉えた上で、《はげしい困難な戦闘の必要がなかつたせゐるか、この攻略記録は、しごくのどかなものである》、《のどかなばかりでなく、弛緩してゐるとさへいへるかもしれない形式をとつてゐる》（38頁）と否定的に評している。

※同時代資料の引用に際しては、原則として適宜ルビ・傍点を省略し、旧字を新字に改めた。なお、本研究はJSPS 科研費 23K00327 の助成を受けたものです。

Fundamental Examination of Ashihei Hino's *KantonShingunsho* (*Notes on the March to Guangdong*)

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

In this paper, I examine one of the war literatures, *KantonShingunsho* (*Notes on the March to Guangdong*) (1938-1939) by Ashihei Hino, which is based on the Sino-Japanese War. Because it did not fall within the framework of the "Soldier Trilogy" ("Wheat and Soldiers," "Dirt and Soldiers," and "Flowers and Soldiers") that made Hino so famous, *KantonShingunsho* (*Notes on the March to Guangdong*) has had little opportunity to be examined in research history. However, *KantonShingunsho* (*Notes on the March to Guangdong*) was one of Ashihei Hino's first serialized newspaper novels, written at the same time as "Hana to Hyo-tai," and is an important work with many issues to examine, including not only aspects related to content but also the form of publication, its characteristics, and post-gun reception. In this paper, I have therefore aimed to establish a research foundation by checking the first appearance of the book in newspapers and in monographs, and by proceeding to a preliminary discussion of the aspects of its contemporary reception and contents, in order to draw a starting point for research on *KantonShingunsho* (*Notes on the March to Guangdong*).